

森林の利用価値と保全

森野真理（吉備国際大学）

森林に対する人々の関わり方は、その時代の価値観に左右される。屋久島に暮らす人々の森林に対する空間認識は、大きく「前岳」と「奥岳」に区分される。「前岳」とは、海岸部からそびえる標高約 1200m までの山々で、「奥岳」とは、前岳に囲まれた島の中央部の峻険な山々を表す。屋久島では、人の居住地は、沿岸部の狭い平野部に限られている。海岸沿いの各集落は、前岳の照葉樹林を生活に不可欠な空間として利用・管理してきた。一方、奥岳は、神聖な空間として、かつて一切の生産活動は禁じられていた。奥岳のヤクスギが利用価値の高い資源として伐採され始めたのは、江戸時代以降である。地域住民は、それぞれの場を使い分けながらも、直接的・間接的に、森林を連綿と利用してきたのである。

ところが、1993 年、島の一部が世界自然遺産に登録されたことを機に、存在価値や非利用価値といった森林の非利用価値が、利用価値に匹敵する価値として認識され始めた。遺産登録後の屋久島に関して行われた、森林の価値についての経済分析では、評価額の大部分が非利用価値であったという報告もある。そこで、本研究では、地域住民の森林に対する価値観と保全意識の関連を明らかにするために、森林（前岳照葉樹林）に対する価値観が異なるグループ間で保全意識を比較した。

分析データとして、2002 年に筆者らが実施した、森林に対する意識調査（対象；屋久島全域の地域住民）の結果を利用した。まず、照葉樹林を残した方がよいとする回答者に、その理由を 6 択（自由回答含む）から二肢回答してもらい、利用価値および非利用価値に分類した。その分類をもとに、回答者を 3 つのグループ（非利用価値グループ、利用価値グループ、非利用価値および利用価値グループ）に分けた。各グループ間で、照葉樹林を増やす方が良いかどうかについての回答を比較したところ、利用価値を有するグループで、肯定的な回答率が高かった。つまり、非利用価値のみしか有していないグループは、照葉樹林増加に対し、他のグループと比較すると消極的であった。また、各グループで、照葉樹林の現在の利用頻度を比較すると、非利用価値および利用価値グループの利用頻度が高かった。グループごとの利用形態については、利用価値グループは直接利用が多く、非利用価値グループは間接利用が多い傾向が示された。これらの結果から、利用価値が認識されることが保全意識に結びつき、森林に対する価値観は、利用頻度や利用形態の違いによって形成されることが示唆された。